

書陵部 蔵 青表紙本源氏物語「柏木」における

「む」「ん」などの使い分けについて

昭和四十八年度の国語学演習で、標記の資料を勉強した。(新典社版を用いた。)その作業の一つとして、仮名「む・ん」、「加・可」、「志・之」について、それぞれの間に何か用法上の違いは無いか調べてみた。以下は、その概略の報告である。

(一) 「む」と「ん」

(ア) 助動詞「む・らむ・けむ」には、両方が用いられていて有意差が認められない。

(イ) 係助詞「なむ」(約五〇例)には、すべて「ん」が用いられていて、「む」は見られない。

(ウ) 終助詞「なむ」(一例)は「ん」。

(エ) 第一音節には「む」が用いられ、「ん」は用いられていない。

(オ) 第二音節以下には両方が用いられているが、動詞の活用語尾には「ん」は用いられていない。

(カ) 挿入撥音には両方が用いられている。なんと(なんと)うちすむし(打誦)

(キ) 漢語における鼻音の区別による使い分けは、なされていない。

(ク) 「加」と「可」

単純語に分解し、それぞれを詞と辞とに分ける。形容詞語尾は辞に入れた。

(ア) 詞の場合。語頭では、ほとんど差が見られない。(共に約一六〇例) 語中語尾では、「加」の用いられることは少なく、

ほとんど「可」が用いられている。(約三〇例対三四〇例)

(イ) 辞の場合。「加」の用いられることは、きわめて少なく、ほとんど「可」が用いられている。(約二〇例対一二〇例)

(ウ) 「志」と「之」

作業の基準は(二)と同様である。

(ア) 詞の場合。語頭では区別なく用いられている。ただし量的には「志」が多い。(約八〇例対五〇例) 語中語尾では、「志」の用いられることは、きわめて少なく、ほとんど「之」が用いられている。(約五例対三三〇例)

(イ) 辞の場合。「志」の用いられることはきわめて少なく、ほとんど「之」が用いられている。(約二〇例対三五〇例)

以上のとおりである。

(一)について言えば、ムには「む」を、ンには「ん」を用いるようになる過渡の様相を示すものかと思われるが、この種の資料には、転写に伴う複雑な事情のあることが推察されるだけに、単純には論じられないものがある。また(二)について言えば、語中語尾にはほとんど「可」「之」が用いられているのは、おそらく、上の文字からの運筆上の理由によるところが大きいのであろう。形容詞語尾が行頭に来た場合に、「志」の用いられる傾向が明らかに認められる。

(東辻保和記)